

海上の森講座

海上の森から考える 里山・人と自然のかかわり（現地講義）

日時：平成24年7月21日（土） 10:00～15:00

講師：木村 光伸（名古屋学院大学リハビリテーション学部長、教授）

概況



「海上の森の意義と里山発見」

講師：木村 光伸

第1時限 講義1

○海上の森の意義

瀬戸市は産業処分場が多い地域である。

海上の森が新しい意味のある所かもしれないと認識させたのは万博である。

万博会場候補地となる以前は、名前も知られていない森であった。このとき、海上の森の価値に気づいた人が現れ、「森をどうすべきか」という点について様々な議論がなされた。

○都市近郊林と里山の違い

都市近郊林は、体験できる森林といえる。一方、里山には生活がある。生活がある森林が里山であり、管理のあり方が異なる。

第2時限 現地観察

○海上の森の観察

小雨の中、吉田川沿いの林道から屋戸川の湿地へ、屋戸川から寺山川沿いの尾根道を通り鎌倉時代の窯跡、周辺の人工林を観察し、再び吉田川沿いの林道へ戻り、センターに至るコースを観察した。

このコースには、海上の森の要素が全てある。尾根筋の痩せた森林、砂礫層、谷筋のシデコブシ、湿地群落、古窯跡、人工林である。このすべてが海上の森の自然を形成している。

第3時限 講義2

○里山学を実践するために

里山は、ほとんどが放置された二次林である。この二次林は、目的のない林となっており、林業的には低質広葉樹林、いわゆる有用樹種のない森林である。

そこにシデコブシという孤立的な希少種が生育していた。海上の森にあるシデコブシは、谷ごとに孤立したものではなく、遺伝子的には繋がりのあることが分かってきた。

海上の森は、地形、地質、植物、動物などが関連しあって一つの自然を形成している。このことを理解し、バランスを保ちながら管理する必要がある。